

あの、「日本一の個人投資家」竹田和平さんの最新刊！

けっきょく、お金は幻です。

——何が、いちばん大切か。

これからの時代を生き抜く指針。



竹田和平・著

サンマーク出版

定価＝本体価格1400円＋税

2009年5月16日発売

(地域によって書店に並ぶのが数日遅くなる場合がございます)

※実際の本では、内容や文章に多少の変更がある場合がございます。

本書「プロローグ」をお送りさせていただきます。

ぜひ、知人・友人にご転送ください。

プロローグ

けつきよく、
お金は幻です

なぜ私のもとにお金が集まってきたのか

竹田和平という私の名前をもしご存じなら、どんな肩書きで知っていたか知っているでしょうか。私の「本業」はお菓子会社の会長です。むかしなつかしいタマゴボーロとかウエハースなどの菓子を製造する竹田製菓という企業のオーナー。それが私の職業です。

けれども、私の名はおそらく「日本一の個人投資家」としてのほうが有名でしょう。会社四季報を開けば、やたらと名前が出てくる、百を超える上場企業の株主。そんなふうにマスコミで紹介されることが多いからです。

会社のオーナーで投資家などと聞けば、あまりかんばしくないイメージを抱く人も多いかもしれません。派手な外車に乗り、高い背広の袖口そでぐちに金ぴかの腕時計を光らせた金満家。あるいは、株価の上がり下がりあがりくだりに絶えず目を凝らしながら、投資で儲けたもう札束に埋もれているお金の亡者。思い浮かぶのは、おおかたそんなところではないでしょうか。

しかし、実際に私に会ってくれた人は、まったく違う印象をもつようです。

どんな場所でも、誰と会うときでも作務衣さむえを着て、いつもニコニコ笑みを絶やさず、口を開けば名古屋弁丸出し。立ち居振る舞いも飄々ひょうひょうとしている気のよさそうな爺じいさん——そんなイメージがあるようなのです。

世間では金持ちの部類に入れられているようですが、私自身はたまたま世間のお金を少しばかり多めにお預かりしているだけだと思っています。それどころか、かえってそのお金をどのように使い、世の中に役立てるか、責任がずしりと自分の肩にかかっているようにも感じている。

お金は大事なものですからいいねいに扱いますが、それほど執着があるわけではない。私の人生の中で、お金の重要度や優先度はそんなに高いものではないのです。

それどころか、お金がなくても人間は幸せに生きられる。富は幸福の絶対条件ではないとも考えているのです。

いま資産があるからそんなことをいつているわけではありません。まだ若く、そんなにお金がないときからそう思っていましたし、事業でお金に苦労したときにも、心の

根っこにいつももちつづけていた私なりの金銭哲学なのです。

お金は幸せの絶対条件ではない——そういう思いがあったからこそ、私のもとにお金が集まってきたのかもしれませんが。

お金がすべてではないと見極めていたからこそ、多くの人が儲けの追求に躍起になり、欲とお金が飛び交う投資の世界に身を置いていても、淡々とした思いでお金に惑わされることもなければ^{おぼ}溺れることもなく、ここまで生きてこられたのではないかと、そんな思いをもっているのです。

金融危機が起こったほんとうの理由

いま世の中は、百年に一度の大不況などと騒ぎ、そこから脱却する術^{すべ}も見つかからないようにいわれています。でも、そうなった原因は簡単です。私たちがしごくあたりまえのお金に対する考え方を忘れてしまったからにすぎません。どういうことかといえ、お金というものを過大評価しすぎたのです。

お金は経済の裏方です。経済の主役は製造やサービス提供など、実際の生産や販売活動にあります。それがモノやサービスに価値をもたらし、その価値があちこちでひんぱんに取引されることによって経済が回っていくわけです。

お金は、その実体の経済活動をサポートする支援役にすぎません。ところが米国流、ウォール街発の金融経済は、その裏方にすぎないお金を主役に据えてしまった。経済価値を測るものさしであるべきお金自体に、大きな価値があるような幻想を世界中に振りまいたのです。

お金という幻が実体のような顔をして、それもうんと大きな顔をして、大手を振って歩いていった。でも、それは虚を實に見せかけたトリックにすぎなかった——この仮面がはがれたところから、今回の世界不況は始まったといえます。

原則を見失って、裏方であるべきものに主役を演じさせていたわけですから、遅かれ早かれ、破綻はたするのはあたりまえなのです。

しかし、それだけにそのあたりまえの原則を取り戻せば——お金を裏方に戻して、实体经济を主役に据え直すという経済の原点に戻れば——時間はかかるかもしれませんが

んが、経済は立ち直っていく。これもまた、しごくあたりまえの道理なのです。

だから大恐慌といえども、「大きく慌て、恐れる」必要などない。とりわけ日本は、世界に冠たるモノづくりの国であり、実体経済の足腰のとても強い国ですから、経済の原則を取り戻せば、立ち直るスピードはどこよりも速いはずです。

このように、あたりまえを忘れたときから、人は誤った道や迷い道に足を踏み入れてしまいます。

ところが、あたりまえのことというのは、あたりまえであるがゆえに、いつも忘れられがちなのです。

とくに現代は、「あたりまえを忘れてしまった時代」といえます。

たとえば、いまテレビや雑誌を見れば、ああすれば病気を防げる、こうしないと健康になれない、そんな話題であふれ返っています。ところが、同じテレビや雑誌にはグルメ番組やグルメ記事も満載です。

美食飽食をくり返せば、肥満やら糖尿病やら、健康を損ねてしまうのは、みなさんもよくご存じの医学の常識です。それなのに、おいしいものはおなかいっぱい食べた

いし、さりとして、健康も保持したい……。

そもそも腹八分目という原則を日ごろから守っていれば、ことさら高価な薬や医療の世話にならなくても、人は健康を保っていられます。

人間には、これだけを守っていれば間違えることはない、かならず成功や幸せの道を歩むという、天の意に沿った生き方の基本原則があるのです。

人はかならず老いるし、かならず死にます。古今東西、老いなかった人、死ななかつた人は一人もいません。生老病死は人間だけでなく、すべての生命が通過しなくてはならない生き物の原則なのです。

ところがやっぱり、そのあたりまえのルールを忘れたか、気づかないふりをして、いつまでも若くありたい、どこまでも生きていたい、とばかり願うような人がふえましました。

あたりまえの原則を常に忘れずにいる。もし忘れたら、そのあたりまえの原点にいつも返っていく。そのことが、仕事をするうえにおいても、生きるうえにおいても、いちばん大事であり、また、もっとも有効なことなのです。

うまくいかないときこそ、あたりまえに徹する

ものごとがうまくいかないときや思うようにならないとき、私たちはいつもと変わったこと、違ったことをしたがるものです。ときには、ふだんやったこともない「すごいこと」をやってやろうと力んだりする。

変わったこと、すごいことをしないと、この苦しい局面を打開できない。そう思い込んで、つい答えや解決法を遠いところ、高いところへ設定したがるのです。

しかし、それはたいいていの場合、逆効果に終わります。むずかしい問題をむずかしく解こうとすると、事態はもつとこんがらがってしまふからです。

では、どうしたらいいのでしょうか。むずかしい問題はやさしく解くことです。大きな問題ほど小さなところ、近いところから解決していくのです。

たとえば、山を一つ築こうとしたら、あなた自身が率先して一塊の土を運ぶことから始めなくてはなりません。頭の中で効率や人を使うことばかり考えていても、土はひと握りだつて動かせません。

何か困ったことや悩みごとがあつて、それが困難な問題であればあるほど、「あたりまえのこと」から始める。ふだんと変わらないことを、いつもより、少しだけ、しっかりとやる。そんな「あたりまえをおろそかにしない」姿勢が何より大切になってくるのです。

私はたまたま株式投資の世界で、個人投資家として少し名を知られているようですので、人から上手な投資術や儲ける方法をたずねられる機会も多い。

「さぞかし、すごいテクニクや複雑な手法を駆使しているんでしょうね」

けれども残念ながら、株にかならず儲けられるなんていう黄金律はありません。

いや、ないといえばないし、あるといえはあるのですが、それはけつして、すごい投資法の中にはありません。あるとすれば、それは、ごくあたりまえの原則の中に存在しているのです。

私の投資法とは、一言でいえば、優良な株を安いときに買って長い間持ちこたつづけるというオーソドックスなもの。情報源も、ほぼ会社四季報しか使いません。四季報を見れば、その会社のもっている価値がわかります。そのうえで、その価値よりも安い

値がついている会社の株を買っていくわけです。

そのような優良株を買ったら、それを長く持ちつづけながら、その会社を育てていくのです。時折、投資先の社長さんに会って、相談にのったり励ましたりもします。あるいは少々厳しい言葉で叱しかることもあります。

また、十分に成果を上げて配当を出していただいたときには、感謝状を贈ることもある。そんな株主などまずいませんから、たいてい驚かれます。

私は株主というのは、「旦那だんな」だと思っているのです。日本にはむかしから、旦那衆といわれる人たちがいて、経済的にも精神的にも人びとの支えとなっていた。それと同様に、現代においては、企業の株を買うことで資金を提供し、また経営者を応援することでその会社を発展させ、それがひいては社会全体を成熟させていくのです。

そんな思いで株式投資をしているので、私が株主になっているのは中小企業ばかりです。もとより自分自身が中小企業の経営者なので、大企業よりは、小さい会社の社長社長の気持ち気持ちが手にとるようにわかるのです。それゆえに、応援して育てていきたいという思いもいっそう強いのです。

私が株式投資を始めたのは二十代のころですが、最初は誰もが通るように株価ばかりを気にする「投機」として始めました。うまくいくときもありましたが、痛い目にもたくさんありました。ひどい損害を被ったことも数えきれないほどあります。その中で、株式の原点とは何なのか、資本主義の根本とは何なのか、深く考えさせられました。

そして長い年月を経てたどり着いたのが、株式投資とは資金を提供することによって、その会社を応援し、育てていくという、ごくごく「あたりまえ」の原則でした。あたりまえというのは、シンプルでいて、なかなかそれを貫き通すのはむずかしいものです。でも、あたりまえを守れば、結果として儲けもやってくるし、そのあたりまえを外せば損をする。長い経験則から、そのことがよくわかってきたのです。

昨今の世情を見ると、生きるため、幸せに暮らすためのあたりまえの原則を見失っている人が多いように思います。そのくせ、人よりたくさんお金を稼ぎたい、人の持っていないブランド品を持つていたい、そんな「あたりまえ以上のこと」は人一倍したがる。

それでは、明日の幸せを追うあまり今日生きるのをおろそかにしているようなもので、いつまでもほんとうの幸福を手にすることはできません。

いまの世の中のゆがみ、人の心の不安はそこから、つまり、あたりまえを忘れて、あたりまえ以上のものを求めていることから発している。私にはどうも、そのように思えてなりません。

もし、あなたが大きな悩みを抱えていたり、困難に直面していたり、この世に生きにくさを感じていたりしたときは、ため息をついたり、悲観したり、絶望したりするまえに、

「あたりまえのことを忘れていないだろうか」

「原理原則を見失ってはいないか」

「足りないんじゃないかと、余分なものが多いんじゃないだろうか」

……そういった自問を自分の胸に突きつけてみてください。そこから解決の糸口や新しい視点がかならず見つかるはずですよ。

お金がなくても幸せだった疎開先での生活

では、私はなぜ、お金についてそんなふうを考えるようになったのか。

その原点は、もう六十年以上も前の田舎いなかの山村での経験にあります。

そのころ私は小学六年生で十一歳。日本は戦争の真つ最中で、私の住む名古屋でも空襲が激化してきたことから、祖母の生まれ故郷である、ある田舎の村へ疎開するこ
とになりました。

疎開先のその村は、戦争など、どこの国の出来事かと思えるほどゆったりとした時
間の流れる、のどかな空気に満ちた一種の桃源郷でした。

人びとは農業を中心とする素朴ななりわいによって生計を立て、その暮らしぶりは
いまから思えば驚くほど貧しいものでしたが、住む人の誰もが温かく穏やかな心をも
ち、まるでおとぎ話の中のように平和に暮らしていました。

おとぎ話はそれだけではありません。

私は村で過ごした一年の間に、お金というものを一度も見ることがありませんでし

た。誰かからもらった覚えもなければ、どこかで使った覚えもない。むろん大人が金をやりとりしている場面を目撃したこともありませんでした。

村の人たちがどうやって食料や日用品を手に入れていたかといえば、豆腐を買うには、豆腐屋さんに大豆を持っていき、その原料を渡す代わりに商品の豆腐をもらってくる。たまに町へ出かけたときも、持参したこうじとお米を交換してくる。

戦時中の配給制度のせいもあって、そんな物々交換が日常的に行われていたのです。だから、かりにお金をたくさん持っていたとしても使い道はほとんどありません。村の中では、お金（現金）の価値はとても低いものだったのです。

では、村の人たちはそのお金のない生活を苦にしていたか。まったくそんなことはありませんでした。

みんな一様に貧しい生活をしていましたが、誰もが勤勉で誠実に一生懸命働いていました。貧しいが欲は少なく、身の回りのつましいことで満ち足りて、とても明るく幸せそうだったので。

そのころ、大人たちがひんぱんにいい交わしていた言葉を、私はいまでもよく覚え

ています。それは「ありがたいのう」「もったいないのう」「おかげさまでのう」の三つです。幼い私はこの言葉をどれほど耳にしたことか。

「今日も天気がよくてありがたいことですのう」

「ほんとになあ、おかげさまなことですなあ」

顔を合わせれば、誰もがそんなふうにあいさつを交わすのです。

つまり村の人たちは、ものを大切する心や人を思いやる心、天の恵みに感謝する心などをこの三つの言葉に集約していたのです。この三つの言葉を軸に人びとは生活を律し、心を磨いていたのです。

それはお金の代わりに、言葉を通じて「心」が流通していた世界でした。そしてその世界は、いまのお金にあふれた世界よりもはるかに幸福に満ちていたように思えます。村の人たちは「お金がないのに幸せ」ではなく、「お金がないので幸せ」に暮らしていたのです。

心のブレーキになったお金は幻という思い

桃源郷での疎開生活は一年で終わりを告げましたが、そこから学んだことは小さくありませんでした。小さいどころか、その後の私の人生の土台を築いてくれた大切な経験であったといまでも感謝しています。

なかでも大切なのは、「お金はしょせん幻にすぎない」ことを肌身で知ることができた点です。

富は幸福の絶対条件などではなく、お金なしでも人間は十分幸せに生きられること。お金の代わりに、感謝や思いやりや喜びの心が幸福の要因となりうること。お金はなくてはならないものでなく、あれば便利だが、なくても平気という相対的な存在にすぎないこと。

そういうことを、あの村での生活体験が私に教えてくれたのです。

考えてみれば、人類の歴史において、生活の中に金銭が流通し、お金が力をもったのはつい最近——ここ数百年——のことにすぎません。それ以前の何万年という長い

間、人間は自給自足や物々交換によって、ずっとお金なしでもちゃんと生きてきました。人間にとってお金のない歴史のほうがはるかに長いのです。

とりわけ、お金なしでは何もできない、幸せにもなれない。そんな経済至上主義が幅をきかせ、富と幸福を直結させる考え方が大手を振って歩きはじめたのは、たかだか戦後の六十年ぐらいのこと。

その意味で、「お金で買えないものはない」という金銭万能主義は、ごく最近の風潮に惑わされた思い込み、幻想にすぎないのです。

私が事業や株式投資で大きな金額のお金を扱いながらも、その幻想に惑わされずにすんだのは根底に疎開先の村での体験があったからです。人間はお金なしでも幸せに生きていけることを幼いながら心の根っこに植えつけられたこと。それがその後、私とお金の関係をうまくコントロールしてくれる制御装置となったのです。

そのおかげで、喉から手が出るほどお金が必要となったときでも、私はお金との距離をつかず離れず適正にとることができ、自分の欲望を律して、お金の亡者にならずにすんだのだと思います。

正直なところを告白すれば、私も若いころは株式投資に熱を上げて、借金で株を買う信用取引というやり方をしました。きわめて投機的なばくち性の高い投資法で、信用をやっている間は楽観的な私もさすがにキリキリと胃が痛んで、体を壊しそうになりました。

あのまま続けていれば、私はかなり高い確率で自己破産の憂き目にあっていたことでしょう。けれどもあるとき、「おれは体を壊してまでカネが欲しいのか。この命はお金に代えられないぞ」。そう気づいて、それきり信用取引はやめてしまいました。

また事業においても、手形取引で商売していたころは、相手がきちんと手形を切ってくれるかどうか、いつも心配してはなりませんでした。これもあるとき、「なんだバカバカしい。相手の手形のことまで気をもむくらいなら、いっそ現金商売にしてしまおう」

と考えて、商品売るのも、原料を仕入れるのもすべて現金決済にしてしまいました。手形取引をやめれば売り上げは確実に縮小しますが、それでもいいやと割り切つてやってみたら、これがけっこううまくいったのです。

いずれも欲はあったが、その欲に溺れなかったためにぎりぎりに踏めたブレーキでしたが、そこにお金はしよせん幻であり、人生でいちばん大切なものではないという「村の教え」が働いていたことは間違いありません。

お金が欲しい、儲けたい。いまでもそんな欲望が自分の中に生まれたとき、私の脳裏にはあの村での生活が浮かんできます。村の人たちの幸せそうな、満ち足りた温顔を思い出すのです。それは私に、

「お金なんぞなくたって、ちゃんと生きていけるぞ」

という戒めを思い出させてくれます。お金万能は幻想にすぎないという思いがお金への執着心をそぎ落とし、欲望の肥大にブレーキをかけてくれるのです。

お金より大切なものを忘れてはならない

もちろん、現代に生きる私たちにとって、お金は必要で大事なものです。お金は幸せの絶対条件ではないが、必要条件の一つであることは確かなのです。

では、お金の本質とは何か——それは、とても便利な「道具」であるということですよ。うまく使えば、これほど役に立つものはありません。その一方で使い方を間違えると、これほど怖いものもないのです。

お金は欲の母体です。その欲が膨らんで人間がお金の家来になってしまう。ほんとうは人間が主人で、お金は召使いであるべきです。お金を使う主体はあくまで人間でなくてはならないのです。

しかし、しばしば欲がその関係を逆転させ、道具にすぎないものが主人となって人間を操ることになってしまう。お金があれば何でもできる。お金がなくては何にもできぬ。私たちは財布や通帳、宝石やブランド品がないと幸せになれないと思いつ込んでいることが多いのです。

今回の金融恐慌の引き金となった米国のウォール街のやり方などはまさに、このお金に最高価値を置く考え方が基本にあつて、手元に現金もないのに数字上の金額を操作するだけで巨大な収益を得るような仕組みを駆使していました。

それは、カネにカネを生ませる虚構のゲームです。それこそ幻想Ⅱバーチャルにす

「ぎないものをさも実体であるかのように愚かにも信じ、人にも信じ込ませていたわけです。」

この幻想を実体と取り違えたことの弊害は大きいものです。何より人を不幸にしていまいました。たとえば、わが国では年間の自殺者が三万人を超えています。むかしの貧乏な時代より、豊かになったいまのほうが自殺する人がはるかに多い。これはモノは豊かだが、心はさびしい時代だということをも物語っているといえます。

その「豊かさの不幸」がどこからきたかといえば、お金を絶対的なものと考えたから。物質的豊かさに最高の価値を置いたからです。お金は「あれば便利な」道具にすぎないのに、それを「なくてはならないもの」と取り違えたこと。そこから豊かさの中の不幸は始まったのです。

幸せさえもお金で買える——そんなぐあいにお金にばかり目が行って、お金では価値の測れない大切なものを私たちはいつのまにか見失ってしまっていたのです。

それなら、お金より大切なものとは何でしょう。人間が幸せになるためには、お金以外の、お金以上の何が必要なのか。あの村の生活のように、お金なしでも満ち足り

て暮らすのに必要なものとは何なのか。

それを私は本書を通じて述べていこうと思っ
ていますが、一言でいって見れば、「徳」と「眞心」というキーワードに集約でき
ると思います。

これからはお金の時代に代わって、心の時代、徳の時代がやってくるというのが私の持論です。そこではお金に金利がつくのではなく、徳に利息が生まれるのです。心に金利を生ませて、お金をためるよりも心に徳をためていく。そういう「貯徳」の時代が到来するのです。

ここでいう徳とは何なのか。それを語るときにいい例があります。わが国に古くから伝わり、私たちの誰もが知っている「花咲爺さん」の話です。

ご存じのように、このむかし話には正直爺さんと意地悪爺さんが出てきます。正直爺さんは大判小判のありかを探し当てる犬のポチを飼っていますが、これを妬ねたんだ意地悪爺さんがポチを殺してしまふ。

正直爺さんは悲しみながらポチのお墓をつくってやり、そこに植えた木から白うすをつくりまふ。すると不思議なことに、その白でついたモチがすべて小判になります。

これを知った意地悪爺さんはさっそく、その白を奪い、モチをついてみます。しかし小判どころか、牛のフンやら魚のハラワタしか出てこない。怒った意地悪爺さんは白を叩き割って燃やしてしまいます。

白をポチの生まれ変わりだと思っていた正直爺さんは、その灰を大切に持ち帰りますが、その灰が風に吹かれて枯れ木に花を咲かせるのです。正直爺さんはさらに村中に灰をまいて、村を花でいっぱいにします。そうやってみんなを喜ばせる正直爺さんに殿さまはほうびを与えます。

この後の結末も、みなさんよくご存じでしょう。それをまねしようと意地悪爺さんは家中の灰を集めてまきますが、花が咲くどころか、人びとの目に灰が入って村は大迷惑。けつきよく、牢屋ろうやに入れられてしまう。こういうストーリーです。

二人の爺さんの幸不幸を分けた決定的な違いはどこにあるのでしょうか。

それは、自分のためか人のためか、徳があるかないかにあります。強欲な意地悪爺さんが欲にとらわれて自分の利益だけを追求したのに比べて、正直爺さんは無欲恬淡てんたん、やさしく温かい真心をもって、意地悪爺さんの所業さえ責めずうらまず、いつも人の

ために尽くした。正直爺さんが枯れ木に咲かせたのは「徳の花」であり、その徳がまた小判も生んだのです。

これからはお金よりも「徳」をためる時代

貯徳の時代には、そうした花咲爺さんの徳がお金に代わって必要になってくるのです。そのような徳の高い生き方が、お金の代わりに幸福を保証してくれるのです。

その貯徳の生き方とは具体的にどんなものか。詳しくは次章以降で追って述べていきますが、たとえばあたりまえのことを大切にしながら、平凡で正直な生き方を心がける。誰に対しても、何に対しても、「ありがとう」という感謝と喜びの心で接する。明るく前向きで、わくわく楽しい「肯定心」で生きる。自分のためよりも人のために優先するように努める。いつも心を磨き、天の意に則して、大きな命を生きる。

そういうものです。けっしてむずかしく考える必要はありません。日常生活の中で自分にできることをやっていけばいいのです。

うんとすごいことを一日だけやるよりも、小さなことでいいから毎日少しずつやっていく。あるときドカンと一万円札を貯金箱に入れてそれきり忘れてしまうよりも、子どもが毎日十円ずつためていく。そういうささやかな行いの積み重ねによって、徳というものは蓄えられていきます。一つ徳を積んだとき、一つ心に金利がつくのです。あるいはまた、ないものねだりをするよりも、いまあるものに感謝する「足るを知る」生き方に努めること。そのときに人間の心は磨かれ、人として成長し、その器が大きくなります。お金は正直者ですから、人間の器のサイズに合わせて寄ってきます。お金は欲の大きさではなく、人間の大きさ、成長度合いに合わせて集まってくるのです。つまり徳がお金を生んでくれることになるのです。

徳などというと、いかにも古くさいという反応が返ってくるかもしれません。

現代に生きる人間はあらゆる点で過去よりも進んだ時代に生きていると思いがちです。だから新しいものにししか価値を認めない人が多い。でも、それはとんでもない思い違いかもしれません。

いまよりも過去のほうが、新しいものより古いものほうが、高い価値をもっていた

ものもたくさんあるからです。そのことはいま述べてきた、あの疎開先の村人たちの暮らし方やお金と幸せの関係、富の豊かさや心の貧しさの関係などを考えてみれば容易に理解できるはずです。

村人たちは古い価値観の中で、理屈や知識を使って頭で考えるのではなく、感謝や思いやりを心を使って養い、伝えながら、穏やかで安定した暮らしを営んでいました。お金の代わりに徳を重んじ、お金をためる代わりに徳を蓄える生き方をとくに力むこともなく、自然に実践していたのです。

そのような「古くさい」生き方をしてきた彼らのほうがいまの新しい時代に生きる私たちよりもよほど幸せであり、また幸福になる術も熟知していたと思えます。少なくとも心や徳という点では、むかしよりいまのほうが進歩したなどと気楽に口にする気にはどうしてもなれないのです。

ですから、以下、本書で述べる内容は、徳や心という、いつの時代にも通用する古くて新しい生き方の基軸を新しい時代に生きている人たちに伝えるための教科書。いや、教科書というのがおこがましければ、参考書であると自負しています。